新制作

会報 No.60
発 行
2010年12月15日
編集・発行人
橋 本 裕 臣

発行　新制作協会　〒110-0013 東京都台東区入谷2-4-2 増田ビル202　Tel.03-5603-8350　Fax.03-5603-8360
http://www.shinseisaku.jp/

2010年・第74回新制作展

第74回 新制作展 新会員・受賞者紹介

新会員

絵画部

新保甚平

◆まず最初に申し述べることは、お礼でございます。この度は新制作協会会員にご推挙下さり、本当に有難うございました。謹んで御礼申し上げます。「すなわち、初心忘るべからず」を肝に銘じ精進いたす所存でございます。

今後ともどうぞよろしくご指導下さいますよう、お願いします。

◆一九四九年石川県生まれ。一九七七年金沢美術工芸大学油画専攻卒業。一九八一年第45回新制作展初入選。第56回、70回、71回新制作展新作家賞受賞。

田村研一

◆推挙頂き有難うございました。お世話になった先生方に深く感謝しています。初入選作品の拙さに、二十年は黙って出品する覚悟をしました。それでも、十四年無冠となると辛くなり、一念発起、楽しく滑稽な物語の光景を描くことを思いつきました。念願の初受賞から三年で会員は信じられない出来事でしたが、息子たちや教え子に磨斧作針を示すことが出来ました。非才の身ですがよろしくお願いします。

◆一九六九年京都府生まれ。一九九一年京都精華大学美術学部洋画専攻卒業。一九九四年第58回新制作展初入選。一九九一年武蔵野美術大学大学院修了。第72回、73回新制作展新作家賞受賞。

松木義三

◆二十三のとき、青木繁展をブリヂストン美術館で見て、心底絵が好きになりました。

新制作展に強い絵の意志を感じ、憧れて出品し始めました。毎年の進歩はわずかなものでしたが、描き続けるうちに分かってきたこともありました。いただいた助言は心の奥にしまって糧としました。

会員となった今、その名に恥じないようにと、身の引き締まる思いで緊張しております。

◆一九四八年北海道生まれ。千葉大学卒業。一九八七年第51回新制作展初入選。第69回、73回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部

加藤裕之

◆この度は、会員にご推挙いただきましてありがとうございました。新たな出発点に立った思いです。今までと違うのは、背中に責任という重石が加わったことですが、その重石もこれからの自分を鍛えてくれるウェイトのつもりでしっかり踏ん張っていきます。出品の度に叱咤激励のお言葉を下さり、応援して下さった方々をがっかりさせないよう、今後も自分の制作としっかり向き合い、新たな自分の可能性に挑戦していきます。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

◆一九六三年岩手県生まれ。一九八七年東海大学教養学部芸術学科美術学課程卒。一九九三年第57回新制作展初入選。第68回、73回新制作展新作家賞受賞。

木方立樹

◆歴史ある新制作協会の一員に加えて頂けることを光栄に思います。これからも多くを学ばせて頂きたいと思っています。同時に、先輩方がこれまでにつくってこられた価値に甘えず、これからつくるべき何らかの価値を生み出していく過程に参加出来るならば、これ以上の喜びはないと考えます。自分なりの反アカデミズムの精神と新芸術を志す制作に、今まで以上に厳しく取り組みたいと思います。

◆一九七一年愛知県生まれ。一九九七年愛知県立芸術大学大学院修了。一九九八年第62回新制作展初入選。第67回、69回、72回新制作展新作家賞受賞。

増井岳人

◆私は現在、塑造における具象の仕事を中心に、テラコッタを用いて人間をテーマにした彫刻の制作を行っています。

即物的な視覚体験から生じる現代の普遍的現実を、歴史的な経験を基に、人体表現を通じて模索していきたいと考えています。

◆一九七九年神奈川県生まれ。二〇〇六年東京芸術大学美術研究科博士課程中退。二〇〇三年第67回新制作展初入選。第70回、71回、73回新制作展新作家賞受賞。

吉村維元

◆新制作展に初めて応募したときのことを今でもはっきりと覚えている。当時、

大学四年生で井の中の蛙、搬入場で待ち受けていた挫折。僕の作品が一番拙く、頼りなく見え、その場から一刻も早く立ち去りたくて仕方がなかった。それ以降、会員の沢山の目、様々な意見がだらしのない僕の背中を押してくれたのだと思う。でも、いつまでも請い続けるわけにもいかないので、内省、推敲を重ね励みます。

◆一九七一年東京都生まれ。二〇〇〇年金沢美術工芸大学修士課程彫刻専攻修了。一九九八年第62回新制作展初入選。第68回、73回新制作展新作家賞受賞。

若松美佐子（わかまつみさこ）

◆テキスタイルデザインを学んでより、主に織物用糸、手織製品の企画・制作の仕事に携わり、現在に至っております。いつか自由な作品制作を続けていきたいと願い、本協会に参加させていただきました。作品の完成毎にいろいろな問題点を見出し、新たな喜びと悩ましさを抱え込むこととなりました。でも、〝実りの時を待ちわびる〟力を失わない自らであろうと考えております。

◆一九五二年東京都生まれ。一九七四年大塚テキスタイルデザイン専門学校卒業。二〇〇四年第68回新制作展初入選。第72回、73回新制作展新作家賞受賞。

スペースデザイン部

福井一真（ふくいかずま）

◆この度は会員に推挙していただき有難うございます。スペースデザイン部に初めて出品してから十年の歳月が流れました。十年の月日の中で、自分自身がようやく「つくること」について向き合えるようになり始めたかな、と感じ始めた矢先の出来事で、大変驚いています。

これからはさらに気を引き締めて参りたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

◆一九七九年京都府生まれ。二〇〇九年兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科修了。二〇〇一年第65回新制作展初入選。第72回新制作展新作家賞受賞。

新作家賞

絵画部

河村雅文（京都）　田代青山（大阪）
永井　優（東京）

彫刻部

上松和夫（静岡）　遠藤丈太（東京）
高家　理（宮城）　新美正樹（愛知）
人見崇子（東京）

スペースデザイン部

井野若菜（滋賀）　園浦眞佐子（千葉）
高田　文（愛知）　福浦美樹（愛知）

74回展点描

審査・陳列

●絵画部審査陳列報告

絵画部　木嶋正吾

絵画部の審査は今年も厳選となりました。搬入者は４０９名で、そのうち入選者は２８３名、内訳は、小品部門が36名、データ部門が11名、一般部門が２３６名でした。二年目となった小品部門では表現の多様化と質的向上がみられ、絵画部賞受賞者も１名出ました。三年目となったデータ部門は斬新で新鮮な作品を多く見ることができました。しかし、何といっても多くの受賞者と新会員を輩出し高いレベルでの充実をみせているのは一般部門で、絵画部の本貫をなしていることを証明してくれました。

陳列はパーテーションの配置を替え、二階はベテランの会員を中心に安定感のある充実した作品、三階は若い会員を中心とした実験的で清新な作品をテーマルームとしました。入選作品もシュミレーションを重ね部門毎に一段掛けにして、それぞれの特色を活かし会場全体を大切にした展示を心がけました。

最後に、会員各位と出品者各位のご協力に感謝し、新制作展の益々の「進歩と向上」を祈念して報告といたします。

●第74回展審査・陳列報告

彫刻部　市川悦也

審査を始めるに当たって出席の会員諸兄にお願いしたのは「私たち会員は、二十世紀後半に彫刻家として認められ、世に出た恩恵を新制作展に感じています。私たちがこれから審査するのは、応募してきた彫刻家の卵たちの中から二十一世紀を託せるに足る作家を発見する作業なのです。先を見つめる作家はともすれば足元に目が行かず言葉不足な表現になりがちです。心を広く持ち暖かな目で審査に参加願います」でした。

審査に参加した70名弱の会員は、真摯に温かい目でかつ厳しく審査に集中しました。搬入者１０２名（内データ審査応募者5名）、搬入点数１５２点（内データ審査６点）、審査対象点数１４１点、入選点数78点、シード作家３名搬入５点、データ入選５点を加算して88点の入選を数え、結果64点が選外作品となりました。初入選18名、再入選67名。再出品者にとって厳しい結果となりました。受賞会議では、票数が割れることがなく衆目一致し、混乱することなく受賞者が決まりました。新会員４名を迎えることになり、新作家賞５名が決定しました。昨年に比し、搬入者９名、12点増、入選点数５点減となりました。初入選者の定着を願っています。

昨年から始めたデータ審査は、まだまだ改良する必要があるのですが、応募者にもお願いがあります。データの基になる写真撮影にも神経を注いでほしいのです。両者の努力を重ねることで、この新しい制度を充実させてほしいと願っています。データ審査を充実、育成していくことで、遠方で制作されている方々の出品が容易になることを願います。

今回は、佐藤忠良さんを始め若干名の会員諸兄が出品されませんでした。酷暑の夏が原因かと推察します。75回展では、元気に再会出来ることを祈念いたします。

陳列委員長の平山隆也さんのご尽力で、スッキリした会場が構成されました。

●スペースデザイン部審査陳列報告

スペースデザイン部　田中　遵

今年のスペースデザイン部の展示スペースは、展示室可動壁の位置を変えて展示区画設計を変更した。この変更により、入口から展示スペースを概ね見渡せるスッキリした展示となった。この可動壁の位置変更は、前回の73回展で、一般観覧者より、入口付近が暗い、そして入りづらいという意見が多く寄せられたことも理由の一つとして挙げられる。

今年の応募者数は87名、応募点数は91点となっており、昨年と比較して、前者が14名、後者が12点増えたことになり、嬉しいことである。この応募者数の増加は、今年5月より行ったデザイン教育を行っている日本全国の教育機関などへの徹底した宣伝の効果もあると考えられる。

入選点数は、昨年の48点と比較して54点と6点増えている。また、初入選者数が23名となっており、前年度比で9名増えている。これも前述した宣伝効果の結果を示していると思われる。

陳列後の受賞者会議では、議論白熱の末、新会員2名と新作家賞受賞者4名が決定した。今後の活躍を期待して、今までになく多人数となった。

また、今年のワークショップのテーマは「しんぶん紙でイスを作ろう!!」であった。ゴミの処理問題が騒がれている現代に合った、新聞のリサイクルがテーマである。普段、何気なく捨てている新聞紙が、使い方によっては硬くて手頃な椅子になることに気がつき、子供から大人まで大いに楽しんでいる様子が見られた。

最後に、前回より始めた作品写真販売に加え、スペースキューブという10㎝角の透明なアクリルケースに納められたグッズの販売も始めた。これは各会員が提供したものであるが、この試みは一般観覧者に評判よく受け入れられ、品切れを起こすほどであった。

スペースデザイン部では、今後も部の活性化に寄与する新しい試みを探求し、社会に刺激を与える活動ができればいいのではないかと思う。

＊受賞作家展＊

74回展新作家賞受賞者による受賞作家展を左記のとおり開催いたします。開催初日にはオープニングパーティーも行います。皆さまのおいでをお待ちします。

絵画部

■会　期　11年1月24日(月)～29日(土)

■会　場　銀座井上画廊

☎03―3562―1911

彫刻部

■会　期　11年2月14日(月)～24日(木)

■会　場　ギャラリーせいほう

☎03―3573―2468

スペースデザイン部

■会　期　11年1月24日(月)～29日(土)

■会　場　建築会館ギャラリー

☎03―3456―2051

ひとときき

74回展の新作家賞の賞牌は、彫刻部の細谷泰茲氏に制作を依頼しました。

「吾子(あこ)と」（ブロンズ）

新制作 生みの親 育ての親〈5〉

絵画部会員　荒井茂雄

今回は、前号で予告した新制作の熱狂的なファンの一例から入ります。この文章の中に、他を辛辣に批判する箇所もありましたが、ただただ純粋に新制作を想う姿を伝えたく思い、全文を掲載します。

＊　＊　＊

◇畫家ならぬ者からの手紙

A・B・C

「新制作君

君が展覧會を初めて在野として上野の杜に開いてから丁度一年經つ、一年、この一年が二年、三年いやモツト長かつた様な氣のするのは僕だけだらうか、何だか君が随分色々な仕事をした様に思ふからだ、昨秋上野美術協會の旗揚展以來小品展　個展等々君の仕事は街頭に相當活発だった、併しそんなことは大したものぢやない、ぢや何故僕の様な感じがするんだらう。

結局僕はこう思ふ。現在の我が洋畫壇には本當の仕事をしてゐる人が極めて寥々、生活からにじみ出た仕事をしてゐる人等殆ど見當らないから君の仕事に心をひかれたんだと思ふ。

大家、中家、小家は現洋畫壇の文展にも在野展にも相當數居る、だが大家の大部分は既に畫家でなくなつてゐる、功成り名遂げて美衣飽食、一個の社會人としての生活に隠棲した、だからたまたま畫家たりしことを知らせるために筆を執れば、明治何十年か大正何年頃かの現代日本洋畫陣に陳ぶものを描く、或はチヨツチヨツと小手先で御免蒙る、中家は或者は大家並に小手先に走り、或者は社會人としてのハク付けに一生懸命だ、中には眞面目に「何をどう描くべき?」と惱んでゐる人々もあるが、その人々がかつて傾倒し心血を注いだ思ひ出のイズムに突進した様にはいかぬ、今更デツサンから、物の見方から出發するには名をなし過ぎて苦しいらしい、小家はモウ滅茶苦茶だ、今秋の文展を見ても、その他の展覧會を見ても描く魂膽が見えすいた、大あせりものしか描いちや居らん、扨そこで、新制作君

君は團體内で互に地位や勢力を競ふ必要もない。君は君の進む道をグングン突進すればいいんだから、大家や中家にならんでもいゝ、君は畫家たる君の生活が描きたいと欲求してやまぬ畫材を君の心で肚で頭で腕で描けばいゝんだから、大家や中家にならんでもいゝ、君は實に惠まれたる、だが苦闘せねばならぬ畫家なんだね、まだこれからなんだ、君はだからまだ何も仕事をしちやいないんだよ、これからなんだ、健闘して呉れ給へ!!」

――と親身になって情熱を述べています。自分だけでは自分が創れない如く、新制作も新制作だけでは創れないことを……。ファンとはありがたい存在である。

＊　＊　＊

新制作の歴史を語るとき、この人、朝日新聞記者・竹田道太郎氏を避けては語れません。同氏は昭和35年に『画壇青春群像』(雪華社)、同37年に『美術記者30年』(朝日新聞社)を書いていますが、この二冊の本の中に、こと新制作の件になると本職を忘れて無我夢中になって行動してしまう――このような様が書かれているので、いくつか抜粋し並べてみます。

《第一話》（前文省略）

「当の画家達よりも私の方が心配でたまらない。翌朝起きぬけに私は本郷曙町の藤島武二を訪ねる。『先生、心配なんです。大丈夫でしょうか』『なんじゃ、新制作のことか？　大丈夫じゃ、僕がついておる』『先生が？』『うん、わしじゃ。若い者の言う方が正しい。だからわしも正しい方へつく。今さら帝展へ帰るなぞもってのほかじゃ』この言葉を耳にしたとき、私は早く猪熊に、三田に、佐藤、小磯、内田にこの言葉を聞かせたいと思った。彼らの喜ぶ顔が頭の中にクルクルと浮かんでくる。（中略）

『君みたいな元気のある者が応援してくれたら、新制作も心丈夫じゃろう。しっかり頼む』。藤島さんのその言葉に送られて私は辞去したが、この吉報を一人で胸にしまっておくことができないまま、猪熊へ電話をした。『そうかい、君にも先生が言明してくれたか。実は一昨日、僕ら数人は先生に脱退のことを相談に行ったのだ。先生は、脱会もやむを得ない、しっかりやれ、と激励して下さったが、応援するとは言明されなかった。新聞社の君におっしゃるなら、そりゃ間違いない。僕たちもこれで百万人力だぞ』。弦さんの大声が、受話器を破りそうに響いてきた。私はもちろんその日、『藤島武二が官展に加わらず新制作を応援する』という記事を書いた」――と。

《第二話》

時は太平洋戦争の前、支那事変の頃。

「政府は国民の心を本格的に戦争遂行に巻き込むために、自由思想の弾圧が強くなり、美術界にもそれが及び、シュール・リアリズムの旗がしら・福沢一郎が検挙された。自由人である弦さん、敬さんのことが心配になってきた。その頃まだ独立の会友だった三岸節子さんから電話があった。『福沢さんのこと、知ってるでしょう。この次は佐藤敬さんだって言ってるわよ。猪熊さんもにらまれてるってことよ。私あたりも危ないんですって……』。私は、電話を切るなりタクシーで藤島家へかけつけた。『何ごとじゃ』時ならぬ私の訪問に、藤島さんは不審顔だ。『ちょっと心配なことがありまして』私は、猪熊、佐藤に関する不安を話した。私の話を聞いた藤島先生は『僕にはちょ

っと手におえん。それは君、ひとつ尽力して二人をやってくれたまえ』『二人を従軍させた方がよいでしょうかね』『ウン、もちろん』と、藤島さんは同意見だ。さっそくこの話を二人にしたが、想像通り『いやだ』と二人とも言った。しかたなく、南京の安田記者に手紙を出した。どうしても二人を従軍させたい国内情勢などこまかに書いて、南京総軍の方から名ざしで呼んでくれるように懇願した。二、三週間ぐらい経った頃、敬さんから電話があり『君がいろいろ心配してくれたが、喜んでくれたまえ、陸軍報道部から呼出しがあり、弦さんと二人で出頭して話を聞いてくるよ』と、機嫌がいい。私が、安田記者に頼んだことなどおくびにも出さずに『行ったら向こうの言う通りにしてくれよ。あまりわがままを言わないでね』と頼むと『わかっている、わかっている』と電話を切った。二人は翌日、社へ私を訪ねてくれた。『何でも南京軍司令部から名ざしで頼んできたんだって。どうして僕たちを知っているのかね』と、気持ちよさそうだ。『それくらい有名なんだ、君たちは』と私がとぼけていると『それほどでもないだろう』と、敬さんはさすがに照れていた。

いい気なもんだと思ったが、これで一安心である。二人が従軍すると間もなく戦地の弦さんと敬さんから絵入りの便りが届いた。あれほど渋っていた従軍だったが、現地へ行くと兵隊さんたちと仲よくなって前線の塹壕生活を送っていると書いてあり、私は嬉しかった。

間もなく勃発した太平洋戦争には、弦さん、敬さんも、軍の命令でいち早くフィリッピンやビルマへ従軍していった。やがて戦争も終わり、その終戦直後に画家の戦犯が問題になってきたとき、二人の名があげられたりしていると風の頼りに耳にしたのである。私は、彼ら二人にもし万一ということがあったら、上京して、そもそもの従軍行は彼らの意志では全然なかったことを証明しようと決意していたが、幸いその必要もなく無事に終わった」――と、このように、思い込むと寝食を忘れて尽くす竹田氏も、いざ自分のことでのお願いごとはまるっきりできない人でした。

《第三話》

竹田氏の母が、弟に伴われて疎開した軽井沢で病死。「そのとき大変世話になった人がいる。お礼をしたいがお金がない。その人は絵が何よりも好き、なんとか都合してくれないか」と弟に頼まれる。「私はひと晩考えさせてもらった。意気地のない話ではあるが、さて翌日、私は田園調布を歩いていた。訪問先は猪熊弦一郎家だ。この際、私はすべてを打ち明けて弦さんに頼んでみようと決心したのである。玄関のベルに応じて出てきたのは、今パリに行っている元気者の行木正義だ。『いよー、珍しい人が現れたもんだ。猪熊さんはまだ帰っていないよ』と、疎開先の吉野村の夫妻にちょうど米を届けるところだったから、その米袋を背負って私に吉野村まで行けと言う。『喜ぶぞ。おぬしが行ったら大歓迎だ』。そして『すぐ近所に敬さん一家があるし、中西さんも荻須さんもみんないるぞ』と付言する。私は、絵を無心することを考えると心が沈むが、新制作派村のような話を聞くとむしょうに吉野村を訪ねたくなって、『よし、すぐ行こう』と、米を一杯詰めたリュックを背負ってしまった。

（中略）私は自分を図々しい男だと自認していたから、この図々しさで押し切れると思っていたが、猪熊家に泊まり、朝起きて、あの晴れ晴れした弦さんが『おはよう』と声をかける。『よくおやすみになれまして？』と、笑みを含んだ文子夫人の顔に面と向かうと、喉がキュッと詰まって言い出せなくなってしまう。『俺は図々しいんだ』と何度自分に言い聞かせてもだめだった。（中略）とうとう一週間滞在して、無心に関しては一言も言えずに東京へ舞い戻った。新宿駅へ降りた私は惨めだった。そんなに惨めな状態だったのに、心のどこかで無心をしないでよかった、助かったと安らぎが動くのが不思議である。猪熊さんとの交際に汚点をつけずにすんだというホッとした気持ちである。『さてどうしたものだろう』私はうなだれて人混みの間をもまれていた。『不景気な顔をしてどうしたのよ』朝倉摂さんである。ここでは話ができないからと、近くの店で茶をすすりながら、今回の上京のこと、母の死のこと、お礼の絵のことなど、一気に話した。聞き終わった摂さんは『そう』と言ったきりで私の顔をしばらく見つめていたが、『どうかしら、私が描いたんじゃ』と言う。『そんなつもりで話をしたんじゃない』と言ったものの、彼女の好意は有難かった。『だって、なくちゃ困るでしょう』『そりゃ！』『私じゃダメかな。有名じゃないし、下手だから』『そんなことはないが、それじゃあまりに厚かましいもの』『美人画でよければ描くわよ』。私には涙が出るほど嬉しい話である。『しかし、お礼をすることもできないし』『何を言うのよ。怒るわよ』『それにしても、まさかただでは』『いいのよ。私でよかったら任して』『悪いな。恩に着るよ』『恩になんか着せません』摂さんはそう言って引き受けてくれた。その後、弟からの手紙で、摂さんの美しい絵を謝礼に持って行って大変喜んでもらった旨の知らせがあったのは一ヶ月後である」――と。

この竹田道太郎さんに会いたくなって訪ねたのは、一九九三年の夏のことです。猪熊弦一郎現代美術館の当時の副館長・長原孝弘さんと二人で竹田さんに会いました。久しぶりに会って、初めから終わりまで創立会員の情熱の話。竹田さんは幸せな顔でした。新制作を夢中に愛したあの頃の幸せな顔がそこにありました。

では、今回はこれにて。次号でまた。

Gallery talk, Open talk & Work shop

●**絵画部**　9月15日(水)の展覧会初日にオープントークを行いました。オープントークは会員が出品者に講評するというものではなく、お互いが一作家として同じ目線で真摯に向き合い対話をするよう心がけました。また、9月18日(土)・20日(月)(祝)の二日間に分けてギャラリートークを行いました。他者の作品を通しての対話の中から新たな気づきがあり、次の制作へ向けてのヒントをつかむ機会になったことでしょう。9月19日(日)は〝恂三の制作公開とワークショップ「簡単！感動！すぐできるモダンテクニック」〟を実施しました。37名の参加者が集い、絵画部会員の渡辺恂三氏によるモダンテクニックの実演と、レクチャーを受けた後に各自作品を制作して頂き、展覧会場に展示しました。画材などをご提供下さいました株式会社サクラクレパス・ターレンスジャパン様のご協力に感謝申し上げます。

●**彫刻部企画**　会員活動報告
―ギャラリートーク・ボリビア国際彫刻シンポジウムに参加して―

10月初めまでは暑かったのに、後半は急に寒くなりました。このような急激な気象の変化が今後も続くのか不安です。今年の猛暑は森林にストレスを与え、各地に熊などが出没し、生態系の狂いに危惧を抱きます。人類は自然に対して、あらゆる資源を獲得し、それが源で領土問題、環境破壊へと発展し、己の首を絞めているようです。

第74回展の彫刻部企画も、このような社会背景から、会員の皆様のご理解とご協力のもとに成功いたしましたので感謝しております。特に、企画・図録委員の方々や太田真木様には大変お世話になりました。お陰様でギャラリートークにも多くの来場者が最後まで熱心に聞いていただけたことを嬉しく思います。

●**スペースデザイン部**　74回展の特別企画として「親と子のワークショップ〝しんぶん紙でイスを作ろう!!〟」を開催、当日は会員の齋藤学氏の進行により、約20組の参加者と多くの見学者が集まり、楽しくワークショップが行われました。

《伝　言　板》

◇**絵画部協友推挙**（入選15回）
大上美智子　緒方和美　小川あぐり
大道寺里子　高野真木子　滝田一雄
田中直子　久居勇雄　平川きみ子

◇**新制作協会eメールアドレス**
新制作協会事務所のeメールアドレスは以下のとおりです。ご利用下さい。
webmaster @ shinseisaku. jp

《お　知　ら　せ》

75周年記念展特別企画3部合同展示
未来へ　―表現の違いを越えて―

新制作協会は二〇一一年に75回展を迎えます。三四半世紀の区切りを迎え、絵画、彫刻、スペースデザインの3部による合同展示を企画いたしました。光の三原色を加法混色すると白になるように、3部が一つの場を共有し展示することを通して、今までにない表現空間の創出を目指します。私たちは自身の在り様をその始まりと現在を見つめることを通して、未来への眼差しを持ちたいと考えています。絵画、彫刻、デザインといったジャンルの境界は失われ、すべてが意味づけによってアートとなるような現代の美術状況において、集団で作品を発表することの意味は何か。

私たちはさまざまな問題を抱えながらも、新制作という無形の場に集い、一人の表現者としての純粋性を保ち展覧会を実現することを通して、現在において何らかの生きたメッセージを社会に対して投げかけてゆけると信じています。

75周年記念展準備委員会

会報編集委員　絵画部・小島隆三
彫刻部・大田雅代　SD部・中野　威
◇題字　猪熊弦一郎　（吉國写植室）